

洗面所、キッチン、お風呂場、トイレ……。私たちの暮らす空間には、必ず一つは「蛇口」がある。そこから出てくるのは、そう、「水」だ。蛇口から絶え間なく流れてくるそれは、人間にとって欠かせない存在だ。

調べてみると、人間の身体には、体重の六〇パーセントが「体液」という水分でできているらしい（成人男性の場合）。この数値を見れば、人間は水でできている、と言っても過言ではないだろう。（参考…大塚製薬ホームページ）

人間にとって重要な「水」には、「飲める水」と「飲めない水」の二種類がある。地球上に存在している「水」で、九十七・五パーセントを占めているのは、海水、すなわち「飲めない水」だ。「飲める水」は、残りの二・五パーセントほどしかない。このわずかな「飲める水」のうち、約四分の三は南極・北極の氷雪。そして残りの大半は地下水だ。計算すると、「飲める水」は、わずか〇・〇二パーセントだけで、圧倒的に少ないのだ。（参考…A p i s t e ホームページ）

そして、私たちは、蛇口をひねればその限られた「飲める水」を簡単に手に入れられる。当たり前のことだ。しかし、それが「当たり前」ではない人たちがいる。

世界には、水道が通っておらず、自分たちで井戸や川から水を汲まなければならない国もある。しかもその水は、私たちがいつも飲んでいる水とは違い、茶色く、汚いものが多い。その水汲みの仕事を担うのは主に女性で、中には小さい子もいるそう。彼女たちは学校に行く時間や、自分の時間を水汲みに費やし、毎日家族のために重たい水瓶を担ぎ、長い距離を歩いている。その距離を歩数に換算すると、およそ八千歩にのぼる。（参考…g o o d d o ウェブサイト）

その八千歩がどのくらいの距離になるのか、私は実際に自宅から地元の道の駅まで歩いてみた。大体、往復四キロほどの距離で、自分の感覚では、二つの地点は結構離れていると思っていたのだが、歩いてみると、往復でおよそ四千歩と、八千歩には程遠かった。しかし、彼女たちは、毎日、往復で約六キロもの距離を、水瓶を担いで歩いているのだ。しかも、重たいけれど大切な水なので、こぼさないように注意しながら運ばなければならない。この状態で約六キロもの道を歩くには、相当な労力と精神力がいる。その過酷な仕事を、私より小さな子たちがやることもあるのだから、とても胸が痛む。同じ地球に住んでいるいわば「仲間」なのに、彼女たちにとってはこれが「当たり前」なのが悲しい。

でも、この現状を変えようと、行動している人たちがいる。例えば、ユニセフが募金を行っていたり、故・中村哲医師が、アフガニスタンの人々のために井戸や用水路を造ったりと、より多くの人にきれいな水が届くよう、たくさんの人が動き、協力してくれている。

自分一人の力では、直接的に何かを変えられるのは難しいかもしれない。でも、まずは「水」に興味を持って、現状を知ってほしい。そして、より深く調べたり、それを周りの人に話してほしい。そうすることで、改めて「水」の大切さに気付けると思う。私自身も、ガールスカウトの活動やインターネッツで、世界の水に関する現状について学んだ。今までは、家族やスカウト仲間たちと話すばかりだったが、これからは、友達とも話して行きたいと思う。私が話したことがきっかけで、水を大切にしようと思う人が増えてほしいからだ。

地球上に存在する、たくさん「水」のうち、ほんのわずかな「飲める水」。みんなで平等に分け合うために、まずは知ることから。そして、水を大切にするために、水の無駄使いを減らせるように、自分の身近な生活から、見直してほしい。きっとその行動が、周りの人や、現状を変えるに違いない。